

植物文学
研究とエッセイ

古典の花

松田修

蝸牛社

古典の花

一五〇〇円

昭和五十一年十一月一日初版発行

著者 松田 修

発行人 荒木 清

発行所 蝸牛社

〒101 東京都千代田区神田神保町二―三四寺田ビル

電話東京(〇三)二三〇一―八六〇

振替口座東京 九一六二七六八

印刷所 浩文社

製本所 イマキ製本

© OSAMU MATSUDA

1976

0095-090019-1093

目
次

I 上代の植物

記紀の植物

7

風土記の植物

50

上代人の生活と万葉植物

79

万葉時代の色彩と染料植物について

89

「秋の七草」について

99

II 万葉集の未詳植物

「土針」について

113

「つまま」について

122

万葉集の「壺師の花」の正体

135

花勝見考

143

III 自然と文学

花の文化史 153

枕草子の植物 160

源氏の植物と自然描写 173

兼好法師の自然観について 194

許六の「百花ノ譜」について 207

あとがき 229

I
上代の植物

記紀の植物

記紀の性格

「記紀の植物」という命題は、いうまでもなく「古事記」と「日本書紀」に現われた植物の研究であるが、それを述べる前に、最初にこの「記紀」というものの性格を明らかにしておきたい。

ご承知のごとく「古事記」は七一二年（和銅五年）に、また「日本書紀」は、七二〇年（養老四年）に編纂された日本最初の歴史で、時代的にいえば七世紀の末から八世紀の初めごろに、完成した文献である。そしてその編纂の目的はその序文によると、「古事記」は、第十代天武天皇（六七三～六八五）が、当時の諸氏族の間に伝っていた帝紀（歴代の事蹟を記録したもの）および本辞（神話・伝説などの伝誦）に誤りや偽りのあるのを歎かれて、正伝を定め後世に伝えようとして、舎人である稗田阿礼に命じて、帝王日繼（歴代の伝記と皇室の系譜）および先代四辞（本辞と同じ性質のもの）をば誦習させられたが、その志が遂げられないまま亡くなられたので、第十三代元明

天皇（七〇八〜七一一）が天武天皇の遺志を継がれて、おののやすまろ太安麻呂に命じて阿礼が誦習したままを文に書かせたものであるとその序文に記している。この「古事記」は上中下の三巻からなり上巻には神話、中巻には神武天皇（年代未詳）と応神天皇（年代未詳）、下巻には仁徳天皇（四二〇〜四三九）と推古天皇（五九三〜六二二）までの事蹟が記載されている。

また「日本書紀」は、「古事記」から八年遅れて、前記のごとく元正天皇の養老四年（七二〇）に撰進されたものであるが、その意図は、「古事記」はわずか三巻で、しかもそのうちの一卷を神話にあて、史実としては名実の伴わないものがあつたので、中国の堂々たる史籍にならんで恥ずかしくないものを作ろうという趣旨にそい、歌謡の表記以外は全部漢文で記述し、編集は天武天皇の第三皇子舎人親王とねりが主となり、「古事記」の筆録者太安麻呂が編者のひとりとなり、当時の多くの学者の協力によって成立したもので、これに収載された時代は「古事記」よりも長く、「古事記」が第三十三代推古天皇で終りになっているのに対して、「日本書紀」の方は、そのあとをうけて第四十一代持統天皇（六八六〜六九六）の代までにわたっている。体裁は三十巻からなり、卷一（神代上）、卷二（神代下）、卷三〜卷三十（神武と持統）となっている。

記紀の植物研究の意義

以上のように「記紀」は、日本最初の、しかも日本人自らが日本の社会や歴史、思想について記述した本として、それ自身貴重な文化財であるばかりでなく、だじな史料といわなければならな

い。それ故に「記紀」は、国学、国文、歴史、考古、文化史、民俗とあらゆる面に研究の対象となり、終戦後はさらに新しい視野から研究されているという状況であるが、しかし、植物面から検討したものは、故白井光太郎博士の「古事記に見えし植物」(一九二四、本草学論攷所載)ぐらいのもので、それもわずかに九種の植物についての本草学的考証で、「日本書紀の植物」については皆無といつてよい。これは「記紀」は歴史もので、植物の世界とは凡そ縁が遠いとする考え方が支配しているからだと思われるが、歴史とは文化の発達を記述するものであるなら、植物はそれに随伴するものであっても時代の文化と何らか結びつき、その要素をなしているものである。したがって、それを明らかにすることは、史実を明らかにする上に役立つばかりでなく、当時の自然や民俗や生活を考える上の資料ともなるわけで、私はここに「記紀」の植物を取上げようとするものである。もともと「記紀」の記録は政治史として、とくに「日本書紀」には加工の部分があることもいわれているが、しかし植物は、これとは何らかかわりあいのないものである。したがって「記紀」の植物は、少なくとも七〜八世紀の時代には日本に存在していた植物と考えてよいもので、それ自体これは古典の植物として研究の価値があるし、さらにそれらの植物が、日本在来の植物なのか、渡来の植物なのか、渡来の植物とするとどういう目的で、それがどこから渡来したものであるのか。またそれらの植物は上代の民族の生活や文化面にどう結びついていたのか、などについて分析してみることは決して無意味のものとは思われないし、本論文もこうした生活、文化面に立脚しての「記紀」植物の研究である。

〔注〕なお本論文の作成に当って底本として岩波版、日本古典文学大系「古事記」および「日本書紀」を採用し、参考書には次の諸本を参照した。

増訂・日本博物学年表（白井光太郎）日本生物学の歴史（上野益三）植物渡来考（白井光太郎）植物渡来考（向坂道治）日本神話（上田正昭）古事記の世界（西郷信綱）日本書紀の研究（丸山二郎）日本文化史（家永三郎）日本古代文化史論（田村実）など。

神代の植物

本論に入って、まず神代の植物というものを検討してみたい。神代とは一体いつの時代なのか、それも明らかでないが、「古事記」の上巻および「日本書紀」の巻一（神代上）、巻二（神代下）はこの神代の歴史を記している巻で、この中から植物を拾ってみると次のようなものがある。（植物名は「記紀」の用字・○印は欠を示す）

古事記・上巻

日本書紀・巻一～巻二

葦あし（牙かび）

葦あし（牙かび）

蒲えびかつら子のみ

蒲えびかつら陶ら

筍たむら

筍たかんな

桃子もものみ

桃

阿波岐あはき

櫛あはき

波々迦

○

賢木さかき

坂樹

麻あし（白丹寸手しろにぎて）

白和幣しろわひ

日影ひかげ

蘿・石松ひかげひかげ

真栢まさき

○

小竹葉ささば

籐しの（籐は小竹なり）

稻

稻

11 記紀の植物

と
い
っ
た
植
物
で、
次
い
で
神
代
以
後
の
植
物
を
み
る
と
次
の
よ
う
な
植
物
名
が
現
わ
れ
て
い
る。

芋いも あたね 栲たか 奴波多麻 牟久むく 蒲黄がまのはな 楡う 蘿こけ 赤加賀智 ○ 大豆 麦 小豆 粟

○ ○ 栲 奴波多麻 ○ ○ 杉 桧 ○ 赤酸醬 稗 大豆 麦 小豆 粟

○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ 樟し 竹 波士はし 海蓐こも 海布め 楓かから 羅摩かのみ

柏かし 松 椈まき 天吉葛あまのよさくら 野薦のすず 茅ち 桑 ○ 樟 竹 梔はじ ○ 沖つ藻・浜藻 杜木かから ○

古事記・中卷
(神武・応神)

橘 檳榔 楡 稻 菅 久須 佐章 白檮 椒 蕒 粟 枳 立椶 椶

日本書紀・卷三(卷十)
(同上)

橘 ○ ○ ○ ○ 真葛 百合 ○ 山椒 蕒 ○ ○ ○

椎 歷木 瓠 小竹 野老蔓 松 蒜 比比羅木 黑葛 赤檮 苳 薦 竹

椎 歷木 ○ 篠 ○ ○ ○ ○ ○ 櫟 ○ 薦 ○

13 記紀の植物

檳榔 ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ 藤 檀まゆみ 梓あづき 佐那葛さなかつら 蓴ぬなは 栗 菱
 (古事記・下卷)
 (仁徳ノ推古)

○ 菌たけ 幡荻穂はたすき 槻 桑 白檮しろかし 柏かへ 海石榴つばき ○ 檀 梓 ○ 蓴 栗 菱
 (紀・卷十一ノ三)
 (仁徳ノ持統)

蓮 栗 竹 白樺かし 荻すき 槻 山多豆 笹 多遅花たちひ 桜 薦 菅 大根 椿 鳥草樹さしぶ 御綱柏 苾菜あそな

蓮 ○ 竹 ○ 幡荻はたすき 槻 ○ ○ 虎杖 桜 薦 ○ 大根 海石榴 ○ 御綱葉 燕菁あそな

